特集2

都市再生—水辺の環境整備

都市における水辺環境のあるべき姿

角 野 昇 八*

キーワード：河川、水辺、感性、文化、歴史

1. はじめに

いま、世の中のいたるところで変革が求められている。その背景には、ポスト工業化やグローバル化の時代を迎えたことがあり、また日本独自の事情として、戦後60年を迎えた世の中が未曾有の少子高齢化社会あるいはそれと関連した成熟社会に突入したことがあるとも言えよう。このことから、例えば、工業化社会でもっとも重視された単一種のモノを効率よく大量生産という視点よりも、むしろそれに対峙する形の多様・ゆとり・特徴あるものを尊重という視点になってきている。このような趨勢は水辺整備の動きにも共通してあり、洪水を効率よく速やかに海に排除できるような三面張りの直線河道と一定川幅をもつ河川よりは、蛇行して川幅も変化し、周辺の生態系にも配慮したような河川、すなわち多自然型河川整備が推奨されるようになってきた。くわえて、全国一律の整備よりはローカリティーに配慮した整備の重要性も指摘されるようになってきている。

「効率・大量」から「ゆとり・多様」への動きとあわせて、有形の「モノ」よりも無形の「ココロ」や「知」、「関係性」の重要性も指摘されるようになってきている。「モノ（オブジェ）」に対する「関係性（インスタレーション）」の概念は、1970年代以降、芸術分野で先行的に言われだしてきた考えであり、絵画や彫刻のようにそのものの独立形質のみで成立する「オブジェ」に対して、作品と作品を取り巻く外的要因との相互の関係（「インスタレーション」）なくして成立しない作品を指す言葉として用いられた。例えば、借景を

背景にした庭園などはまさしくインスタレーション的作品と言え、その意味で、日本で近世までは広く親しまれてきた概念と言える。

このような関係性の重要さは、現代の「（環境）技術」に対する姿勢においても指摘できる。近年、技術そのものの追求にあまりにも力を注ぎすぎ、その技術の空間的あるいは時間的、人間的周辺との関係性にあまり関心を払わなくなっているのではないだろうか。このことに鑑みて、機械設計工学分野では、社会・価値・ユーザ・設計者の関係性に着目することの必要性が指摘されだしている。そのような考えの延長上には「感性工学」の誕生があるとも言えるかもしれない。また、大熊¹⁾は、学問分野には数学や物理学などの「真理探究型」と工学や社会科学などの「関係性探究型」があると主張しているが、本論での議論とはほぼ同じ趣旨といえる。都市の分野では、昨今、世界的にその再生がしばしば叫ばれ、Resurgent city や Reengineering という日本でまだ聞きなれない言葉が用いられるようになってきているが、その実現のためには、空間・時間・文化などとの関係性への思索と実践なくしては真の都市再生の達成はないものと思われる。

本稿では、そのような前提に立って、都市における水辺環境のあるべき姿を、都市に住む人々の生活あるいはその歴史や文化との関係性に注目して論じてみる。

2. 往時、川・水辺がいかに生活の中で大切な存在であったかを曾根崎川(蜷川)に見る

往時、川や水辺は洪水・悪水排除や舟運などの

Advisable waterside environment in modern urban area

* 大阪市立大学大学院工学研究科 Shohachi KAKUNO

ための単なるモノとして以外に、生活の中に融け込んで人々の心のなかにまで入りこんだ存在であった。都市に住む人々にとって川や水辺はまさに有形の社会基盤としてばかりでなく、現代の用語で言う「無形の知的資産」としても認知されていたのである。そのことを大正期まで大阪にあった曾根崎川（別名、蜷（しじみ）川）を取り上げて見てみる。また、蜷川やその周辺での船遊びがどれだけ当時の大坂人や来坂の人々に楽しまれたのかも見てみる。

蜷川は、堂島川の大江橋のすぐ上流で北に分流して現在の北の新地あたりを西に向かって流れ、堂島川が土佐堀川と合流する前に堂島川と再び合流するように流れていた長さ4 km程度の小河川であり、貞享2（1685）年、ほかの多くの大阪の川と同様に、開削によって開かれた。現在も桜橋や浄正橋にその名残を残すが、明治42（1909）年の大火後は瓦礫捨て場となり、ついには大正13（1924）年に埋め立てられてしまった。当時から典型的都市小河川と思われるこの蜷川に浮かべた遊山舟で、大坂・大阪の人々は、この蜷川を舞台にして飲んで食べ、唄って踊り、ついには酔っ払って、川でしか味わえない非日常を楽しんだ。

安政2（1855）年にこの川を訪れた清河八郎²⁾（幕末の尊攘派の志士）は、その様子を以下のように記している。「…川のうちは遊舟いろいろありて、鐘鼓の声かまびすしく、酔を倍する事さらに。坂都（大坂）はさらに見物の地もあらで、夏のうちは船遊にまさはらず。川のはた一面

の娼楼にして、翠燈をかがやかし、流れは潏々としてわづか当身の深さなれば、転溺のうれひあらず。船遊びは誠に大坂の至楽、遊覧者必らずいたるべし。…」ところで、この様子が一目瞭然のように見て取れる図が「浪華曾根崎図屏風」（写真1）に残されている。この屏風に描かれている場所や事物、人物の詳細な考証と分析を神山登氏³⁾が行っておられるが、氏によれば、蜷川に浮かべた小舟で涼風を楽しみ、酒を酌み交わす遊興の町人に加えて、川沿いの三軒の茶屋、茶屋女を伴う舟、泥酔して腹ばいになった男、酒樽を流れに落として三味線で手繰り寄せようとしている赤ら顔の酔客、橋下の鰻屋の舟、三味線を抱えて騒ぐ帮間などが描かれていて、まさしく清河八郎が見たのと同じ情景が展開されているのがわかる。また、描かれている橋は梅田橋であり、現在の旧阪大病院跡付近に架かっていたが、文楽の「曾根崎心中」の天神の森の段でお初と徳兵衛が死出の道行に向かう橋がこの橋であることを知るとき、当時の大坂の街のイメージがさらに膨らむとともに、同時に、屏風図の鑑賞にさらに深みが加わろう。

この蜷川は明治期になっても大阪人の心を捉えて離さなかったようである。大阪出身の作家宇野浩二⁴⁾は「あの溝（ドブ）川のような蜷川のとある小さな橋のあたり、橋の上に立って見渡すと、川の両側の向ひ合ったお茶屋の座敷とは、両方から人間が手を出したら握れさうに迫ってゐて、そこらに夜灯がつくと、まるで玩具の国のやうに見える光景、町は又町で、間に川があるか道がある

大阪歴史博物館所蔵

写真1 浪華曾根崎図屏風

写真2 明治期の蜷川⁵⁾

かの相違しかない、いずれも同じ格子造りに掛行燈の軒並が、細い曲がりくねった道に沿うて立ち並んである有様は、…」と記し、明治期に入っすでに決して清浄とはいえなくなっていたこの川(写真2)に一方ならぬ想いを寄せている。

このほかにも多くの文人墨客がこの川に想いを寄せ、文章に著した。「畿内行脚」⁶⁾(1919年)では、三名の作家が文章を寄せている。大阪出身の作家、高安月郊は「日の光で見たら狭い、黒い、泥水の流であった。しかし月の光で見たら濃い、深い、情の流であった。燈の光も流れた、三味線の声も流れた、紫の影も流れた、蜜の様な言葉も流れた、紅の涙も流れた、炬燵の火を湿らす涙も流れた、妬みと恨みの涙も流れた、義理の刃で刺す恋の血も流れた。…」と人情世界の喜びと悲しみを蜷川の水面に照射してみせた。また、歌人の吉井勇は「『蜷川』、ああ、この美しい名を屢歌に歌われた川は今如何になったのであらう。私は次第に滅びて往く夢の街をこの時心から歎いた。さうして暫くはこの街を去ることが出来なかった。…蜷川名のみ残るも悲しかり恋ゆゑ死にし人をおもへば」と詠っている。

これら以外にも、堂島の大地主の家に生まれ、桜博士として有名であった笹部新太郎は、明治期の蜷川について以下のように描写している⁷⁾。「この堂島と北新地とを、あるいは隔て、あるいはつないでいたものが、今はわずかに近松の『曾根崎心中』の名にのみ残る曾根崎川である。せいぜい六七間そこそこの狭い川幅であり、その上、どうひいき目に見ても決して美しい流れなどとは思えない小川にすぎないが、その影も形もなくなった

この小川に尽きぬ追憶を楽しむのは、決して私の郷愁癖のせいばかりと云えまい。うだるような暑さもいつしか陽が落ちて、夕もやにつつまれた満潮はこの小川の岸一杯に新しい水をたたえる。昼間伏せておいたもんどり代わりの古い立樋がこの時刻に小舟でつぎつぎと引き上げられると、鯰(イナ)が随分とれたのなども、いかにも閑かな水都の夏の情景であった。しかも何ととっても曾根崎川の生命は、たそがれ時にそこにもやいで、大川の夕涼みへの美しい客を待つ通い船であった。克明に磨き上げられた船には真紅の毛布が敷かれて、程よい場所におかれた通船と書いた角行灯(あんどん)の夢のような淡い光を受けた毛布と、満潮に浄められた青い水の色のかい美しさは、いかなる巧みな舞台装置も遠く及ばぬことは、明治期のこの川を知る人には過去の誇張でないとなづいてもらえると思う。」

いずれの文章にも、小川であって、しかも決してきれいとはいえない水の流れるこの川に一方ならぬ心情と愛情が寄せられていたこと、蜷川は人々の心の中でなくてはならない存在であったこと、またその存在があつてこそ当時の大阪の街の魅力が倍加していたことなどがうかがわれる。現代の都市の再生を考えると、重要な示唆を与えているように思われる。

蜷川を含め、当時はそこかしこの川面で人々は船遊びを楽しんだ。近松門左衛門の「今宮心中」には、「えいゝゝ、えいゝ、月見、花見はいづくも同じ、諸国名所のその中に、類なにはの船遊び、老も若いも下人も主も、男女がごどご船に袂、涼しき、川風は秋といひても、嘘でないよの、じゃれでないよの、ほん町橋を、漕ぎ出でて見れば、…」と、先の清河八郎同様、全国で唯一大坂でのみ楽しむことができた舟遊びを称えている。幕末の江戸・京都・大坂の風俗について著した喜田川守貞も、「京洛は今時船遊びすることなし、大坂にはあり。夏日を盛りとし、春月之に次ぐ、屋形船あり、楼船を云。大船あり、中船あり。蓋し大中ともに川舟也。屋形船は二階あり。二階の高さ凡そ二尺…」⁸⁾と大坂の舟遊びについて記している。

3. 川・水辺のもつ機能について再考する

河川は洪水・下水排除、水質浄化などの治水・

防災機能のほかに、水源、舟運、漁業などの利水機能を有する。これらは目に見えるか、あるいは論理的・理性的理解が容易な社会基盤としての機能に相当する。従来の河川整備では、これらの機能が十分に発揮できるようにもっぱら整備がなされてきた。また最近では、それら以外にも川・水辺の生態系の保全や創生の重要性が広く認識され、多自然型河川工法にその理念が実現されてきている。しかし、上の蜷川の例でも見たように、都市の川や水辺には、人の心に訴えかけ、入り込むような「関係性的機能」があることに着目する必要がある点を主張したい。すなわち、川や水辺の持つ「知的資産としての文化的機能」である。

河川や水辺の関係性的機能について考えるとき、それは味覚を除く五感を通してさまざまなことを訴えかけることである。まず「視覚」を通して人はそこにオープンスペースを感じるとともに、水面やそこからの反射光、あるいは周辺の動植物、魚、橋などの景観あるいは光と影などに目をやる。「聴覚」を通しては、流れのせせらぎや船の音などを感じる。明治・大正期ごろまで「橋上の覆響、橋下の櫓声」という言葉があったが、これは当時の木橋を渡る人々の下駄や草履の騒がしい音と、橋の下を往く舟のギーギーという櫓の声を表したもので、当時の川辺におけるサウンドスケープがよく理解できるとともに、この言葉が残されていることで、それが人々の日常生活の中に深く入り込んでいたことがわかる。私たちはこのほかにも「触覚」で水の存在を実感し、流れを感知し、吹き渡る風から涼感を感じる。また、「嗅覚」を通して水の匂いや風（緑）の匂いを感じ、ここでもそれらを通じた川と水辺のオープンスペースを感じ取る。

五感を通して川や水辺を感じたあと、人々はさまざまな事柄に想いを馳せるに違いない。例えば、鴨長明の「ゆく河の流れは絶えずして…」、あるいは美空ひばりの唄「川の流れのように」のように、川を見て人々は世の中の動きについて考えたり、あるいはそこに自らの来し方と往く末を照射したりするに違いない。換言すれば、川や水辺で得た感覚によってよび起された認識に基づいて人々はさまざまな思惟にふけることになる。すなわち、川や水辺は人々の「感性」に訴えかけ、あ

るいはそれをはぐくむ存在であると言えよう。「感性」が「理性」と並んで人に備わっている重要な能力であるとするなら、それに訴えかけ、はぐくむ河川や水辺の保全は、社会基盤整備の視点とは別の視点で重要な事柄といえないだろうか。そして、先に見た大坂の街にあった蜷川は確かに五感を通して人々の感性に訴えかける存在であったといえる一方で、そのような河川や水辺の存在は、現代社会においてはもはや希薄になりつつあることが言えるのではなからうか。

4. 今後の河川・水辺整備において重要な文化性の視点の導入

感覚によってよび起された認識に基づいて人々はさまざまな思惟にふけり、また行動するが、それが一定の社会を構成する老若男女によって共有され、認識され、伝達されて共通の行動・生活様式となれば、それはもはや「文化」と呼ぶことができよう。河川や水辺において得られる感覚から人々が同じ思いを共有して行動すれば、言語・道徳・習俗・宗教などと同じく、そこでも「文化」が存在することとなる。そしてその「河川・水辺文化」が、先に見たように、われわれ日本人にとってごく自然で当然の存在であることを考えるとき、文化性の視点を導入した河川・水辺整備の重要性を指摘することができよう。

以上の議論より、文化性を導入した、あるいはそれに配慮した河川・水辺とは、狭義には、人の感性に訴えかける要素を持つ河川や水辺であるといえよう。最近よく話題にされる「感性工学」とは、人間の感性に訴えかける要素を分析して、物理的デザインや技術に翻訳する工学、すなわち人間の感性への「関係性」に配慮した工学といえるが、その意味で感性工学的に配慮された河川や水辺の創出が重要といえよう。例えば、大阪市内の旭区や城東区を流れる城北川には長さ数kmにわたる遊歩道が両岸に整備され、しかもそれは橋梁部分と交差する箇所では橋の下を通る構造として途切れないようにしている(写真3)。この構造は、ジョギングが途切れることを嫌うジョガーの「感性」に合うもので評価が高い。もし途切れる遊歩道であれば、それは単なる「モノ」としての構造物でしかありえなかったかもしれない。

写真3 橋でも途切れない城北川の遊歩道（右端）

また、感性工学とはユーザの視点を重視した工学ともいえるが、その観点から、筆者ら⁹⁾は、城北川を含む複数の河川沿いの遊歩道を付近の住民などに歩いてもらい、その人たちの頭につけた超小型ビデオカメラに撮影された画像を住民自らが見て感想をもらい、そこからあるべき河川整備の姿を集約しようとしている。今後はそのような調査も望ましい水辺環境創出のために必要となろう。

感覚を通して感性に訴えかけ、さらに地域の文化形成に影響を及ぼす河川や水辺であるので、すでに地域にある文化と違和感のない文化形成への配慮も求められよう。そうでなければ、人々に受け入れられずに単なるモノにすぎなくなってしまう恐れがある。この場合、「地域にある文化」とは、地域のDNAあるいは遺伝子ともいうべき存在であり、桑子¹⁰⁾の言う「空間の履歴」であるともいえよう。地域の文化にそぐわない整備の例は、河川・水辺に限らず事欠かない。水辺整備でよく見られる「そぐわない例」としては、水辺にはなかった歴史的事物をそこにシンボリックに再生したりすることなどが挙げられる。また、水辺を多くのゾーニングに分けて整備することも人々の目に混乱を呼び起こし、望ましいとはいえない。さら

にこの観点と蜷川の例を考え合わせるとき、例えば道頓堀川の水質の改善について、さほど神経質にならなくてもいいと言えるかもしれない。逆に、文化性に整合する水辺・河川の事物としては、例えば大阪の例を挙げるとき、その一つは先に見たように「船」とであるといえる。ただし、一般的な舟運の役目を再び期待するには無理があることを考えれば、それは「船遊び」ではなかろうか。

5. おわりに

都市における水辺環境のあるべき姿として、文化性を考慮に入れた水辺環境の必要性を主張した。冒頭で記したように、高度成長期には「関係性」にさほど考慮することなく、モノを大量生産し、技術を開発していればよかった。「交通網が発達し、都市化が進み、社会制度が整い、十分な食料が供給され、経済状態・技術水準などが高度化した文化」が「文明」とするなら¹¹⁾、それは高度な文明社会を築くための当然の道筋であったといえる。しかし少子高齢の成熟化社会を迎えた今、大きくハンドルを切り、文化などとの関係性にも配慮した工学や技術が今後ますます望まれ、また必要とされることと思われる。

参考文献

- 1) 大熊孝：「技術にも自治がある」、農山漁村文化協会（2004）
- 2) 清河八郎：「西遊草」、岩波文庫（2000）
- 3) 「大阪府史」、第6巻、大阪府（1987）
- 4) 宇野浩二：「大阪の花街」、「夜の京阪」中、文久社出版部（1920）
- 5) 「明治大正大阪市史」、第1巻、日本評論社（1934）
- 6) 「畿内行脚」、金尾文淵堂（1919）
- 7) 笹部新太郎：「北の新地と永楽館」、「大阪辯」第3輯、清文堂書店（1949）
- 8) 喜田川守貞：「近世風俗志（守貞謄稿）」、岩波文庫（2001）
- 9) 角野昇八・藤塚佳晃・藤木栄治・内田敬：「ビデオ画像を用いた河川環境直接評価法の提案」、土木計画学研究・講演集（2004）
- 10) 桑子敏雄：「環境の哲学」、講談社学術文庫（1999）
- 11) 「大辞林」、第2版、三省堂（1999）